カレーとドリアン

高城紗貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カレーとドリアン

【Ｎコード】
Ｎ３７４１Ｆ

【作者名】
高城紗貴

【あらすじ】
眼鏡をかけた少年と、一年中頭があれな少年の話。カレーの調理実習、少年の友人がとった行動は！？苦労性の主人公とうさぎという話の番外編ですが、現在のところはあまり関係がありません。

第一話ーこうして、彼の受難は始まったー（前書き）

苦労性の主人公とうさぎという話の番外編ですが、現在のところはあまり関係がありません。

第一話ーこうして、彼の受難は始まったー

第一話ーこうして彼の受難は始まったー

学校の昼休み。

とある学校では、翌日のカレーの調理実習の話題でもちきりだった。
「先生が順位つけるらしいぜ。」
「食材とかも自由にもっていっていいらしいよ。」
「たまご百個持っていくわよ！！」
「やめてぇぇ！！！」
という会話がどこでも繰り広がれていた。
そんな中、茶色に髪を染めた生徒は突然宣言した。
「よし、それなら俺は、誰もが食べたことないカレーをつくるぜ！」
彼の言葉に、話に加わっていた生徒たちは笑った。
「おぉ、お前ならすごいのを作ってくれそうだな。」
「そ、そうか！嬉しいな～。よし、じゃ、俺がんばるぜ！
というわけで新しいカレー作りに協力しろ、眼鏡！」
黒髪眼鏡の少年に向かって、彼は指を指した。
彼の隣にいた少年は、面倒くさそうに顔を顰めた。
「何で俺なんだ？」
「だって、お前、頭いいし、何でもできるじゃん。」
少年はふかぶかとため息をついた。
「じゃ、あとでお前の家行くから！
大丈夫、アイディアはさっき寝てるときに思いついた。」
さっきというのは、おそらく授業中のことだろう。
少年は、もう二度と彼に授業ノートを貸さないことを決意した。

第一話ーこうして、彼の受難は始まったー（後書き）

ツッコミ、批判、感想お待ちしております。

第二話ーサボって来たんだぜ☆ー

第二話ーサボって来たんだぜ☆ー

「なんでいるんだ。」

ところ変わって少年の自宅。
授業も一通り終わり、家に帰るとなぜか彼が普通に台所を使っていた。
「よ、おかえり。」
確か彼は掃除当番なので、帰る時間は遅くなるはずだ。
しかし、今ここにいるということは、サボってきたのだろう。
「とりあえず、いろんな食材をもってきたぜぃ！」
そういう彼の足元には大量かつ、色とりどりの食材が入ったダンボールが。
「ま、いいか。」
少年はいろいろと何かをあきらめて、カレー作りに参加した。

「一応ここまで、料理本を参考にして作ったんだけど、どう？」
「お、うまそうじゃん。」
彼が作ったカレーは、おいしそうにぐつぐつと煮立っていた。
変な食材は入ってないようで、少年はほっと息をつく。
「さてと、ここに隠し味でドリアンを入れて…。」
「え、ちょ、待て！」
しかし少年の静止を聞かずに、彼はドリアンをおもいっきりなべに入れる。
それも隠し味と呼ぶには多すぎる量で。
「ばか！！！！ここまでうまく行ってたのに、なにやってんだ！！！！」

「ばかといったほうがバカなんだぞ！！！」
数秒後、台所はカレーとドリアンの絶妙なハーモニーに包まれた。
「くぅ、なんて臭いだ！！！」
「よし、じゃ次はこれを入れて…」
「やめろぉぉ！！！！！」
が、しかし、彼は少年の静止を無視し、カレーにいろんな食材を入れ続けた。
少年の受難はまだまだ続く。

第二話ーサボって来たんだぜ☆ー（後書き）

ツッコミ、批判、感想お待ちしております。

第三話ー深夜一時ですー

第三話ー深夜一時ですー

「で、明日はどうするんだ？」

深夜一時。
ものすごいにおいで包まれた、台所を背後に少年は電話をしていた。
「うん、おまえが試食会で、ドリアンカレーよりライチカレーのほうがうまいっていうし、ライチカレーを作る。」
電話の相手主は、若干眠そうな声で答える。
あのあと、半ば無理やりにドリアンカレーを試食させられたり、つぎつぎとカレーに変な食材を入れられた少年は、安堵の息をつかせた。
これで、明日学校に死人や病人がでることはないだろう。
「うん、ならいい。ところで、なんでドリアンとかライチとか、日本じゃ簡単に手に入らないものがあんなにあるんだ？」

「え、だって、俺、南国の果物好きだし。」

「…そうか。」
答えになってないような気がするが、そこはスルーした。
とりあえず、ドリアンカレーを回避しただけでも幾分ましだろう。
ライチカレーも微妙だったが。
あ、そういえば…。と電話の相手が言う。
「どうしたんだ？」
「ライチカレーのどこがいいんだ？」
「……。」
「なんで黙るんだよ～。ここはドリアンで…」

「いやー、ほら、ほどよい甘酸っぱさとかさー。」
少年は適当に言ってごまかした。
カレーに甘酸っぱさが必要かどうかは甚だ不明だが。
「俺はドリアンのほうがましだと思うんだけどな～」
「やめてくれ。」
少年は泣きそうな声で言った。
はたして、少年の願いは神へと届くのだろうか？
こうしたやり取りの中、夜は過ぎていった。

第三話ー深夜一時ですー（後書き）

感想、突っ込み、批判、お待ちしております。

第四話ー俺は神になるっ！！（黙れー

第四話ー俺は神になるっ！！ー

「は～い、ではカレーの調理実習を始めます。
みなさん、もう一度手順を説明しますね～。まずは…」

調理実習当日。
少年はのんびりとした先生の話を聞き流しながら、とある生徒を見ていた。
昨日、ドリアンカレーを作った例の彼だ。
少年はなぜか先ほどから、某果物のにおい感じていた。あの壮絶な、台所のにおいが移っただけならばいいのだが、どうも、いやな予感がぬぐいきれない。
「それでは、はじめてください。」
「みんな聞いてくれ！」
先生が始まりを告げた瞬間、彼は立ちあがった。
手にはスーパーのレジ袋をにぎってる。

「俺は昨日、眼鏡と一緒に新しいカレーを開発したが、なぜか眼鏡に作るのを止められた。」

あんなもん、学校で作れるか！と、少年は内心突っ込んだ。
少年はものすごい形相で彼を睨んだ。

「きっと、うますぎて、学校大変なことになるからだと、俺は思う。
そこで、俺はあえてみんなのために昨日開発したドリアンカレーを作ることにする！」

嫌な予感は的中し、少年は泣きそうになった。
調理室はざわめきに包まれた。
「眼鏡、うまいのか？」
「おいしくに食べられたら神だ。」
友人の質問に少年は頭を抱えながら答える。
「よし、食べたいやつはここに並べ！！」
彼の言葉に、生徒たちが集まる。
「おーし！俺は食って、神になる！！」
どうやら少年の言葉を別の意味でとらえたらしい。
確かに、彼は馬鹿だが、人望はある。
「カレーとドリアンって相性悪そうな気がするけどな…。
ねぇ、そう思わない？」
「どうでもいいわ。私たちはさっさとたまごカレーを作るわよ！」
「あ、ちょっ、そんなにたまごを入れたらダメだって！！
あ！！十個もいれちゃダメだって！！！」
となりの少女の叫び声を聞きながら、少年は心労で倒れそうになった。

第四話ー俺は神になるっ！！（黙れー（後書き）

ツッコミ、批判、感想、よろしくお願いします！

第五話ー終わり…、と思いきや！？ー

第五話ー終わり…かと思いきや！？ー

放課後の学校の裏庭。
とある生徒が一人、しゃがんで草を突っついた。
その姿はある意味悲しいものだ。
「…いつまでそうする気だ？草がかわいそうだろ。」
「草なんだ！心配なのは草なんだ！」
「くそ～」といって、彼は再び草を突っついた。
その行動に、今まで背後で見守っていた少年はため息をつく。
「だから言ったろう、ドリアンじゃなくてライチにしておけって。」
「う～」
「というかライチにするんじゃなったのか？」
「だって、インパクトないし。」
少年は再びため息をついた。
まえから頭がどこかおかしいとは思っていたが…、と心のなかでぼやく。
結局彼のカレーを食べれる者などおらず、そのカレーはすべて彼の胃袋のなかへ消えた。
彼の胃袋は最強かもしれない。
「そもそもさ、なんで、ライチカレーかドリアンカレーの二択なんだ？」
「あの二つが一番おいしく感じたから。」
どうやら、彼の味覚はどこかおかしいようだ。
「とりあえずお前はまずその味音痴っぷりを治せ。てか、手術してこい！」
「は！？俺は味音痴じゃね！！というか、治るのかよ、手術で！」
「知るかぁ！アメリカいけばなんとかなるだろう！」

「意味わかんねよ、眼鏡…」
彼は疲れたように溜息をついた。
これでは立場がいつもと逆転である。
「あー、その、なんだ、俺は少し混乱してたようだ。」
「絶対少しじゃないと思うぞ、眼鏡。　……って、あれ？」
「どうした、馬鹿。」
「ば、馬鹿いうな！す、少しお腹痛い…」
「おい、大丈夫か？」
少年は彼に近付き、顔をのぞきこんだ。
「顔が青いな…」
「うぅ、早く帰るよ俺。」
「あぁ、帰って休んだほうがいいな…。途中まで送ろうか？」
「いや、大丈夫だ。」
少年の手をかりて、彼は立ち上がった。
「じゃぁな。」
「あぁ、また明日…」
その後、少年が、彼が病院に運ばれたことを知ったのは、翌日の朝だった。

第五話ー終わり…、と思いきや！？ー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
一応これで完結ですが、まだ続きがあります。
そのうちアップするので、よかったら見てください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3741f/

カレーとドリアン

2010年12月17日06時29分発行